

「原光景」あるいは世界の外に触れること

十川, 幸司

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

言語と文化 / 言語と文化

(巻 / Volume)

10 別冊

(開始ページ / Start Page)

195

(終了ページ / End Page)

207

(発行年 / Year)

2013-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008533>

「原光景」あるいは世界の外に触れること

十川幸司

I

雑誌「ユリイカ」でバタイユ生誕 100 年の特集が組まれたさいに、私はバタイユとラカンの「不可能なもの」という主題を巡る遭遇について、小論を書いた¹⁾。その要旨をおおまかにまとめるなら次のようになる。バタイユとラカンは、1930 年代のアレキサンドル・コジェーヴのヘーゲル読解の講義を介して出会い、二人ともヘーゲルの哲学体系を批判することによって自らの思想を作り上げた。そのさい両者が着目したのは、ヘーゲル哲学の「否定」という概念である。

ラカンはヘーゲル哲学の「否定」概念が、自己の同一性への総合を前提とした否定に過ぎず、この否定概念は、判断機能の最初の是認 (Bejahung) を前提としているゆえに、その外部である「狂気」を捉えられないばかりか、無意識の次元における否定という働きも把握できないと論じた。そしてラカンは、ヘーゲル体系が取りこぼした非知の領域、つまり「不可能なものの可能性」を精神分析経験の中核に置き、自らの理論構築を行なった。

一方、バタイユも、否定という作用が、森を切り開き、耕地を作り、家を作るという形で、世界を人間の可能性の中に包摂していくヘーゲルの弁証法においては、使いみちのない否定性（それは彼自身のことでもある）は、場所を持ち得ないと批判した。バタイユによれば、使いみちのない否定性とは、ヘーゲルの体系が起動するときに最初に放逐された深淵であり、ヘーゲルはその深淵から目をそむけたのである。そしてバタイユはヘーゲル弁証法から放逐されたこの深淵（「不可能なものの可能性」）を自らの経験の中心に据えて、独自の思想を展開した。

このようにラカンとバタイユは「不可能なもの」という主題に着目した点

で、収束点を持つが、さらにその「不可能なもの」を伝達しようと努力した点でも類似した歩みを辿っている。バタイユは「内的経験」で次のように書いている。「ブランショはよく私に問いかけた。どうして君は最後の人間であるかのようにして、内的経験を追求しようとしぬのか、と。しかし、もし自分の最後の人間だとすれば、そのとき不安は考えられる限り最も狂気じみたものであるだろう。…内的体験は一つの獲得であり、それ自体は他者のためのものだ」と。バタイユが言いたいのは、不可能なものの経験とは、私という個人に属するものではないということである。それがもし私という個人に属してしまうなら、それは私の経験として一つの権威となってしまう、ナルシシクな自閉に陥ってしまうことだろう。不可能なものの経験とは、非人称的なもので、個体には属さない。それゆえにこそ、不可能なものの経験は伝達可能であり、この経験は非人称的な共同体（アセファル）を可能にするのである。またラカンが学派設立のさいに重視した「パス」という通過儀礼も、分析経験の核となる「不可能なもの」の経験が、単独的（singulier）な経験でありつつも、その非人称性ゆえに、共有可能になりうるという考えに基づいて考案されたものである。しかし、周知のように、この二人の伝達への賭けは、現実には達成困難な歩みを辿り、現在、われわれが引き受けるべき賭けとして残されている。…私の論述の核心はこのようなものであり、現在も基本的な考えは変わっていない。

一方、酒井健氏は、雑誌「大航海」のラカン特集に寄せた「他者の帳が破られるとき—バタイユとラカン—」⁽²⁾という論考の中で、バタイユからラカンに流れ込んだテーマとして「享楽」、「異質なもの」、「不可能なもの」という三つを挙げている。私が今回、論じようと思うのは、酒井氏が最初に上げた「享楽」および「快」というテーマについてである。バタイユとラカンを享楽を媒介に論じた論文は、すでにラカン派の内部の雑誌で幾つか書かれている⁽³⁾。だがどの論文も、ラカンの理論体系の中で、物事をどのように整合的に説明するかということに終始してしまっている。これは「ラカン派」と呼ばれる人たちの思考の特徴とも言える。つまり彼らはラカンをヘーゲルにしているのである。だが、これほど反ラカン的な態度はないだろう。この論考において私は、「精神分析家とは自らの臨床経験から一切を引き出す者である」という立場から議論を展開しようと思う。

ところで、酒井氏は、この論文の最後で、ラカンとバタイユが体験した他者

の違いを二枚の図像で端的に示している。ラカンの他者を表象しているのは、ラファエロの「サン・シストの聖母」(図1)である。そこに描かれているのは、寸断された身体として生まれた幼児の外観を肯定し、統一する鏡像の世界であり、言語同様に、外的な統一感を重んじたラカン家の保守的な環境の写し絵であると氏は論じる。もう一つは、バタイユが一歳の頃の異様な家族写真(図2)である。盲目の父親は、二人の子供を抱きながら、定めなく虚空に目を送る。父の膝に座ったバタイユは、怯えた表情で、写真を撮る母親を見つめている。ここに写された人々は他者に肯定されることなく、存在している。崇高さと醜悪、憧れと嫌悪…氏はラカンとバタイユをこの二枚の図像で鮮やかに対比している。だが、この二つの図像は、果たして完全に対立した図像だろうか…私は敢えてこのような疑問を提示してみたい。そして私は、享楽を巡るこの議論を、この二つの図像の関係を解読することから始めようと思う。

図1：ラフェエロ・サンティ作「システーナの聖母」1512～1514年頃、ドレスデン国立絵画館所蔵



図2：1歳頃のバタイユ



II

バタイユは、1958年10月にラカンに招かれ、サン＝タンヌ病院にて「快および遊びの両義性」という講演を行なっている⁽⁴⁾。この講演で、バタイユは緊張の解消が快であるとするフロイトの快原理に違和感を示している。そして快は不安定状態を作り出す緊張にこそ結びついていると言う。バタイユによれば快の原理は遊びである。遊びは労働とは異なった、計算不可能な非理性的な行動である。例えば楽譜を演奏することは、一つの労働である。しかし例えばロシアのコーラスのように、歌が飛び跳ねるように変化し、激しくなり、ついには興奮が狂気の域に達するとき、それは遊びであり、快でもある。バタイユは快の瞬間は盲目だとも言う。このようなバタイユの議論は、独創的な理論家のテキスト読解がおおむねそうであるように、もはやフロイトの考えを離れ、彼自身の哲学を開陳している。

フロイトの快原理に対する違和感は、バタイユに限らず、フロイトのテキストを読む者すべてが感じる違和感でもある。バタイユはこの講演では、快の性的な側面に限定しようとは思わないと、いつつも、彼は性的な快感（男性の射精、女性のオルガスム）をモデルにして、フロイトの快原理を理解してしまっている。

フロイトの快という発想を理解するうえで重要な一つの点は、フロイトが言う快とは、機械的に反復する行為がもたらす快だということである。卑近な例を挙げれば、内的緊張を解放する運動（例えば皮膚の反復的接触や貧乏ゆすり等）や、反復する音の連鎖などは、行為として反復されるうちに、私たちの内的緊張を下げる働きを持つ。それは本来、非性的な機械的反復に過ぎない。しかしそれが、人間の性活動と結びつくことによって、機械的な快が性的な快感にもなりうるのである。

フロイトの快を考える上でもう一点、大切なことは、フロイトにおいては快と不快は緊張（興奮）の上昇、下降といった、相反する関係にあるのではなく、反転可能な関係にあるということである。「快原理の彼岸」で、彼は「神経症者の感じる快は、それ自体快と感じられない快である」⁽⁵⁾と述べている。この快と不快の込み入った関係を、フロイトは情動反転（Affektverkehrung）と名づけ、そのメカニズムの解明は、神経症の精神分析において最も重要で、

かつ難しい課題であると「あるヒステリー分析の断片（症例ドラ）」で書いている。

情動反転の具体的な例としてフロイトが挙げたのは、「症例ドラ」の中で、K氏が自分の商店の階段でドラにキスをしたときに、ドラは吐き気を催し、立ち去ったという出来事である。本来ならドラが好意を抱いていたK氏からのキスは決して不快な事柄ではないはずである。しかしドラは、そこで不快な感情しか抱かなかった。そしてフロイトは、「性的興奮を起こす何らかのきっかけによって、もっぱら不快な感情だけが呼び覚まされたりするような人物は、身体症状を生み出す力があるうがなかるうが、私はためらうことなくヒステリー者であるとみなす」⁶⁾と述べている。

情動反転が起きるのは、そこに抑圧があるからだとしてフロイトは考える。しかし、なぜ抑圧された快を主体は、なぜ不快と感じるかという情動反転の謎について、彼は明解な答えを出すことが出来ていない。彼はこの問題に何度か立ち返るものの、はっきりとした結論を見つけることができないまま、ようやく『制止、症状、不安』（1926年）で、この議論を不快から不安の問題へと、問題を大きく変換し、一応の解決を見出している。これが「不安信号説」であり、不安あるいは不快は、主体が危険な場所（それは快のある場所である）へと近づかないための信号だという説である⁷⁾。この説明は自我の防衛機能の説明とはなっていない、主体がなぜ快と不快と感じるかという情動反転の説明にはなっていない。

情動反転の謎に接近するには、それが最も顕著に現れる場面を考えるのが一番適切であろう。その場面を示唆する記述は、1897年5月のフリースへの手紙に同封された草稿L（5月2日）と草稿M（5月25日）に読みとることができる⁸⁾。この時期のフロイトの理論を考える上で、注意しておきたいことは、次の二点である。一つは、彼はまだ当時、抑圧という強力な概念装置を手にしておらず、防衛と抑圧をほぼ同じような意味を持った漠然とした概念として用いていたということである。もう一つは、この時期においてフロイトはまだ誘惑理論（ヒステリーの病因が、親からなされた現実の誘惑だとする説）を完全には捨て切っていなかったという点である。

この二つの点に注意して、草稿Lを読むなら、冒頭の「（ヒステリー患者を理解する）目標は、「原光景」（Urszene）に達することである」という一文は、フロイトのヒステリー患者の治療に向けた宣言として読むことができる。ここ

で言う「原光景」とは、いわゆる両親の性行為の目撃ではなく、父親からの誘惑場面を意味している。そして「原光景」に近づくためには、幾つかの空想を経由することが必要だとフロイトは書いている。というのも空想は、分析家が「原光景」を捉えるための障害物として機能しているからである。分析作業とは、これらの空想を一つ一つ下って行って、「原光景」、つまり誘惑場面にたどり着くことだと当時のフロイトは考えていた。

しかし、この誘惑理論は放棄され、フロイトはヒステリーの病因は親からの誘惑ではなく、誘惑の現実もまた患者の空想の産物に過ぎないと彼は考えるようになる。そしてこの「原光景」という言葉は、誘惑理論の放棄とともに、フロイトのテキストから消えてしまう。しかし、彼の「ヒステリー患者を理解する目標は原光景に達すること」という垂直的な思考方法はその後も彼の中で生き続けていた。一方で、「夢解釈」には、フロイト自身の経験談として、両親の性行為の目撃は子供に最も不安を与えるという注目すべき記述がある⁴⁹。そして、その約20年後、両親の性交渉の目撃としての原光景という言葉は、1918年の「症例狼男」の夢の中で、神経症者の根源的な空想として位置づけられることになる。

原光景は、現実性を欠いたいかにも精神分析的な一つのフィクションとしてしばしば考えられがちである。それは原光景という場面をもっぱら両親の性行為の目撃といった出来事に狭く限局して理解しているためだと思われる。原光景は、子どもが、性交を連想させる音や、両親の喧嘩、動物の交尾場面などを素材にして、子供が作り上げる空想である。それは基本的には空想に過ぎない。しかし、主体にとっては、自己の起源を示す空想であるゆえに、特別な意味を持つ空想なのである。

原光景にとりわけ重要な臨床的意義を与えたのは、メラニー・クラインである。彼女は「結合両親像」という概念を提示し、彼女の言う早期エディプスと原光景という場面を見事に結びつけている。またラカンも、原光景を主体にとって過剰な享樂となる現実（現実界）として位置づけている。ラカンによれば、原光景という現実は、「存在」という次元に属することはない。つまり原光景を主体は「現実」として経験することはできない。それゆえに原光景は世界の外部にあり、主体が幻想という形で「現実」を縁取りすることによって、はじめて世界に「存在」することが可能になるとラカンは論じた。

幾分迂回した議論になったが、多くの臨床事例を参照すると、まさにこの原

光景という場面を前にして、情動反転というメカニズムが最も顕著に出現すると言うことができるのではないか。そのさい、主体は原光景に快、さらには崇高ささえ感じ、一方で不快、嫌悪感を感じる。そして、その二つの情動はしばしば反転するのである。

さて、このように議論を積み重ねたうえで、ようやくわれわれは先に述べた二枚の絵の前に立つことができるだろう。

III

最初にわれわれは、この二枚の絵の前に分析家（つまり神経症的主体）として立ってみよう。一方は、調和がとれた美しい絵画であり、他方はおぞましい家族の写真である。だがもし患者が、セッションの中でこの図像を素材にした夢を見た、あるいはこの図像を素材にした物語を語ったとする。そのさいわれわれは、そこに何を読み取るだろうか。

まずラファエロの絵画である。この絵画について論じるのは難しくはない。というのもこの絵画についてセッション中の連想の中で、雄弁に語った患者がすでにいるからである。それは先ほどから話題に挙げているドラ本人である。ドラはフロイトに報告した「第二の夢」の中で、見知らぬ街をさまよう。そのイメージは、彼女にドレスデンの街をさまよった記憶を連想させる。さらにその記憶は、彼女がドレスデンの美術館で、ラファエロのこの絵画の前で、驚嘆しつつ夢見心地で二時間の間立ちつくしたことを連想させた。フロイトの「この絵のどこがそんなに気に入ったのですか」という問いに対して、ドラははっきりと答えることが出来ず、最後に「マドンナ」と言っている⁽¹⁰⁾。

フロイトはかつてこの絵の前を見て、美の魔力にとらわれたと書いている。「症例ドラ」の中では、フロイトはこの絵のマドンナがK夫人の理想化された姿であると解釈している。確かにドラはマドンナに、優しく子どもの世話をするK夫人の姿を見ていたのだろう。しかしその際、ドラが見ようとしなかった側面にも着目しておく必要がある。それはK夫人とドラの父との関係である。ドラの父は梅毒のため、網膜剥離を起こしていた上に、インポテンツでもあった。それゆえドラの父はK夫人と「口を使って」（フェラチオによって）性的満足を得ていた。ここで症例ドラの病歴の詳細に入る余裕はないが、きわめて図式的にこの症例をまとめるなら、ドラの父は母の代わりにK夫人と関

係を持ち、ドラはその性行為の交換物としてK氏に差し出されていたのである。それをドラがよく知っているということをフロイトは見抜いていた。とすれば、ラファエロの絵画にK夫人の理想化された姿を見ているドラが、一方で見ようとしないものは、父にフェラチオをするK夫人であろう。一言で言うならば、ドラがこの絵画の背後に消しきったものは、ドラと彼女の両親、K夫妻の複雑な関係を根底で支えている、父とK夫人の関係、つまりはドラ家の「原光景」なのである。

もう一方の家族写真で、印象的なのはおびえたような表情でカメラを見つめるバタイユの視線である。バタイユの視線は写真を撮っているであろう母を追っている。一方、盲目の父親はもはや誰とも視線を合わせることがない。少し想像力を働かせるなら、バタイユの視線はこの梅毒の父と関係を持ち、自分を生んだ母に、「どうして僕を産んだの」と問いかけているようにも見える。それは「どうしてこの男と関係して、僕を産んで、この男の血を僕に引き継がさせたの？」という困惑でもある。こうに考えるなら、この写真の背後に、バタイユ家の「原光景」が透けて見えてくるのである。

ここで少し観点を変えてみる。もしこの二枚の絵の前に立つのが、分析家ではなく、ヒステリー患者であるなら—例えばドラであるとするなら—この二枚の絵に対してドラはどのような感情を抱くだろうか。間違いなく、ドラはラファエロの絵に快、あるいは崇高さを感じ取り、バタイユの家族写真に不快、ないしは嫌悪を感じるだろう。しかし、バタイユの家族写真の父、母、バタイユの場所に、ドラの父、母、ドラ自身を置いたらどうだろう。もちろん、ドラの家庭はバタイユほどおぞましい家庭ではない。しかし、ドラの家庭も裕福ではあったが、悲惨な家庭であった。父はバタイユの父と同じく、梅毒にかかり、視力は低下し、錯乱発作と身体の麻痺があった。また母は父が発病した後は、不潔恐怖のため、物事を楽しむことができず、一日中、部屋や家具を磨き上げ、それらを汚さないようにすることに全精力を使い果たしていた。そのうえ、父はK夫人と関係を持ち、それがドラの重いヒステリー症状の原因ともなった。このような家庭をドラを嫌悪していたであろう。

ところで、もし一方の写真の登場人物をドラ自身の父母に変えたなら、ドラはその写真を見て、そこにやはり不快ないし、嫌悪を覚えるだろう。とりわけ梅毒の父に対しては嫌悪を抱くだろう。しかし、おそらくドラはその写真を嫌悪を持って見続けるに違いない。しかもあたかも、彼女がドレスデンの美術館

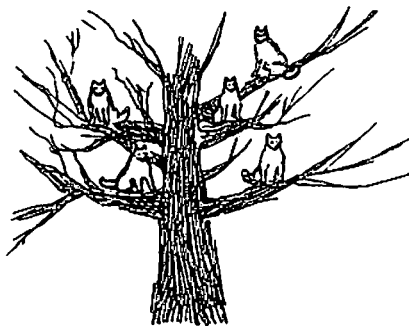
でラフエロの絵を二時間もうっとりと見つめたように、見続けるだろう。そしてその嫌悪感（不快）は次第に、快の感情（しかも快と感じられない快）に変わっていることに気がつくのではないだろうか。これがこれまで述べた情動反転というメカニズムである。私たちは先に挙げた二枚に図像に「原光景」が隠れていることを見た。そして一繰り返すが—このように、「原光景」が問題になっているヒステリー症例において、情動反転が出現することが圧倒的に多いのである。

ここから推測されることは、情動反転とは抑圧といった自我内部の防衛機制とは関係がなく、もっぱら原光景に対する主体の態度に基づいて起きるメカニズムではないか、ということである。これは一つの仮説に過ぎない。しかし、同様の仮説は、フロイトが原光景を論じた二つのテキストからも、引き出すことができるのである。

IV

1890年の12月頃に狼男（セルゲイ・パンケイエフ）は次のような夢を見る。「夜私はベッドに寝ていました。急に窓がひとりでに開きました。窓の向こうの大きな胡桃の木に幾匹かの広い狼が座っているのを見て、私はびっくりしました。狼は六匹か七匹いました。彼らは真白で、どちらかといえば狐かシェパードのように見えました。というのは、それが狐みたいに大きなしっぽを持ち、その耳は何かを狙う犬みたいにぴんと立っていたからです。どうしよう、狼どもに食われてしまうという不安が募ってきて、私は叫び声をあげながら目を覚ましました。（中略）夢の中で動いたものと言え、窓がひとりでに開いたと言うことでした。」というのは、狼たちは木の幹から左右に伸びた枝の上でぴくりともせずじっと座って、私を見つめていたからです。まるですべての注意を私に集中しているかのようでした」(図3)¹¹¹⁾。

図3：狼男のデッサン



この狼男が3、4歳頃に見た夢をフロイトは、主に能動や受動の反転、見

つめられるものと見つめるものの反転など、夢の歪曲のメカニズムを解明しながら、アクロバティックな解釈を施していくのだが、ここではその詳細には入らない。ただ私の議論に必要な幾つかの点に着目しておく。まず第一の点は、その夢は解釈を施される前は、そもそも性的なニュアンスの全くない夢だということである。この夢を支配しているのは、すべての時間が止まったような静けさとその反転としての激しい動きである。そして六、七匹の狼が狼男を見るその集中力の並はずれた高さにも着目しておきたい。これを反転して捉えれば、狼男は、この光景を、あたかも嵐や荒れ狂う海を前にしたかのように、高い緊張の中で、見つめている、ということになる。そしてその光景に巻き込まれようとした瞬間に、彼は恐怖の叫び声をあげ、目を覚ますのである。

原光景を目撃して狼男が感じるのは、このような法外なもの、あるいは暴力的なもの、あるいは顕現を前にした、静止した感情（無感情）である（この議論はカントの『判断力批判』における崇高を巡る議論⁽¹²⁾と密接に結びついている）。このような感情の制止は、原光景を前にした強迫神経症的主体の態度であると言える（狼男は境界性人格障害と診断するのが妥当だが、原光景に対する態度は強迫神経症的である）。だが、ヒステリー患者ならば、そのような法外なもの、暴力的なもの、あるいは顕現を前に、崇高と嫌悪という相反する2つの感情を抱くであろう。これこそが、これまで私が論じてきた情動反転と呼ばれる現象の中核となる機制と考えることができる。

ただここで忘れてはならないのは、原光景を前にして、強迫神経症者が無感情、ヒステリー患者が崇高と嫌悪の感情を抱くというのは、原光景が主体とは無関係という条件のもとにおいてのみ、ということである。もし原光景に主体が関与するなら（あるいは巻き込まれてしまうなら）、原光景は恐怖（享楽）の経験になってしまう。われわれはここで原光景に対する第三の主体の態度として倒錯者のそれを挙げるができる。倒錯者とは、原光景に自らが積極的に関与し、享楽を経験する主体である。

狼男のデッサンについて、もう一つ着目しておきたいのは、デッサンの中に動物（狼）がいるということである。狼男が狼を素材にした夢を見た由来については、グリム童話に狼男の話があることや、アフナーシェフの民話集に由来しているなど、幾つかの説がある⁽¹³⁾が、重要なのは、フロイトにとって動物が出てくるとき、動物たちはしばしば享楽を導くものとして出現しているということである。例えば、鼠男の鼠、ハンス少年の馬、レオナルド・ダ・ビン

チ論における鷹などは、いずれも主体を享楽へと誘う役割を果たしている。フロイトにとって、動物は常に倒錯者の側にいるのである。

*

フロイトが狼男の報告を書いた翌年、「子供が叩かれる」という短いテキストを書いている。この論考はフロイトのテキスト群の中でも位置づけが難しく、この空想が実の娘であるアンナ・フロイトの分析から引き出したという、テキストの成立事情ばかりが取り立たされてきた。だが、このテキストも詳細に読むなら、狼男の報告同様に、原光景を理論化したテキストと考えるのが適切であろう。「子供が叩かれる」という空想は、ヒステリーや強迫神経症者を分析するなかで意外なほど多く報告される空想である。この空想は、そこに快が伴っているということが特徴である。フロイトは、この空想が、三つの局面から構成されていることを論じている。

最初の局面では、患者は「お父さんは子供を叩いている」という空想が告白される。この子供が誰かはこの局面ではわからない。そしてこの空想には無関心な快が伴っている。

第二の局面では、「私がお父さんに叩かれる」という空想が語られる。そしてこの空想には著しく強い快感が伴うという。フロイトはこの第二の段階の空想を最も重視している。そして彼は次のように書く。「最も重要で、また重大な結果をもたらすのは、この第二の局面である。だがある意味では、それは実際には存在しなかった空想と言えるだろう。それは想起されたことが一度もない、つまり意識されたことがない。それは分析によって構成されたものである。だが、そうであるからこそ、少なからぬ必然性があるのだ」⁽⁴⁾(強調引用者)と。この決してわかりやすいとは言えない一節をどう理解するかということがこのテキストの鍵になる。

第三の局面では、「誰か(父親代理の人物)が、子供たちを叩いている」という空想に変わる。ここにおいて、主体の傍観者的な態度は顕著になる。そこにも無関心な快が伴っている。

「子供が叩かれる」というテキストには「性倒錯の発生を巡る知見への寄与」というサブタイトルがつけられている。このサブタイトルは、この論考が叩かれる空想を扱っているゆえに、「性理論のための3篇」の第一篇「性的異常」のマゾヒズムについての記述を補完するテキストと考えられてきた。しかし、このテキストで中心となるテーマとなっているのは、マゾヒズムの問題という

よりも、原光景の一つのヴァリエーションとしての「叩かれる」という空想である。そしてその空想において、神経症者と倒錯者では態度が異なっているというふうに議論を拡張することができるのである。

この空想は神経症者の空想である。したがって、原光景に参加するという第二の局面は自由連想の中で語られることはない。神経症者は原光景に主体的に参加することはなく、あくまで傍観者であり続けようとする。それゆえに第二の段階の空想を神経症者に見出すことは困難である。フロイトが「第二の空想は実際には存在しなかった空想」と言うのは、そういう意味である。それは分析における構成作業によって、あったかもしれない空想として事後的に見出されるだけである。一方、倒錯者は、原光景に主体的に行為として関与する。そして彼らはそこに快ではなく、享樂を見出すのである。

V

さて、享樂と快を巡る議論を、私のもっぱらフロイトの原光景と情動反転というテーマを中心に進めてきた。最後に私は、バタイユとラカンが享樂という問題に対して示した態度の収束点と違いについて考えてみたいと思う。周知のように、バタイユのエロチシズムの表紙は、ベルニーニの「聖テレジアの法悦」であり、ラカンのセミネール20巻「アンコール」の表紙も同じくベルニーニの彫像の写真が使われている。コジェーヴを介して出会った二人は、今度はベルニーニを巡って再び遭遇するのである。

享樂という概念をこの発表では、原光景とほぼ同義として用いてきた。この概念の使用法に従えば、バタイユもラカンもヘーゲル哲学の外部に位置する原光景に魅了され続けてきたという点では、同じである。しかし、原光景に対する態度は、ラカンの態度が神経症者のそれであるのに対し、バタイユは倒錯者が原光景に向かう態度と取っているという点で両者の間には大きな違いがある。しかしこういう場合、それはあくまで原光景に対する態度決定の問題を論じているのであり、両者の精神病理を問題にしているのではないということは強調しておいた方がいいだろう。バタイユに倒錯的傾向があったことは伝記などからも明らかである⁽¹⁵⁾。しかし臨床上の倒錯を特徴づけるのは、このような原光景に対する態度決定だけではなく、ナルシシズムの病理である。倒錯的態度とナルシシズムが加わって、臨床上の倒錯という病理が生じる⁽¹⁶⁾。しか

し、バタイユにはそのようなナルシズムがほとんどといってない。ラカンが自分のことを症状のない「完全なヒステリー者」だと言ったことに倣えば、バタイユは症状のない「完全な倒錯者」だったと言うことが出来るだろう。しかも最も知的な勇気を持った、徹底した倒錯者であったのである。

《注》

- (1) 「バタイユとラカン—不可能なるものを巡って—」(「ユリイカ」1997年7月号、音土社)
- (2) 「他者の眼が破られるとき—バタイユとラカン—」(「大航海」、2006年、No59、新書館)
- (3) 単著としては、次のようなものがある。
Silvia Lippi. *Transgressions. Bataille, Lacan*. Éditions érès. 2008.
- (4) 2004年になって初めて Les Temps Modernes に掲載されたこの講演には、すでに古永真一氏による邦訳がある(「水声通信」no30、2009年、水声社)。
- (5) Sigmund Freud. *Jenseits des Lustprinzips*. GW-XIII.S.7.
- (6) Sigmund Freud. *Bruchstück einer Hysterie-Analyse*. GW-V.S.187.
- (7) Sigmund Freud. *Hemmung, Symptom und Angst*. GW-XIV.S.119.
- (8) Sigmund Freud. *Brief an Wilhelm Fließ 1887-1904*. Fischer Verlag Frankfurt am Main. 1986.
- (9) Sigmund Freud. *Die Traumdeutung*. GW-II/III.S.589-591.
- (10) Sigmund Freud. *Bruchstück einer Hysterie-Analyse*. GW-V.S.258-259.
- (11) Sigmund Freud. *Aus der Geschichte einer infantilen Neurose*. GW-XII.S.54.
- (12) 「判断力批判」第一部、第一篇第二章の崇高の分析論を参照のこと。
- (13) この点について、カルロ・ギンズブルグは興味深い議論を展開している(「フロイト、狼男、狼憑き」、『神話、寓意、徴候』(せりか書房、1988年)に収録)。
- (14) Sigmund Freud. *Ein Kind wird geschlagen*. GW-VII.S.204.
- (15) 「G・バタイユ伝(上・下)」(ミシェル・セリア著、西谷修他訳、河出書房新社、1991年)。
- (16) 倒錯の本質については、次の拙論で詳述した(「ジークムント・フロイト論(1)」、『思想』2012年8月号、岩波書店)。

(精神分析家／精神科医)